

アメリカの映画産業を対象事例とした 大学における映画教育プログラム開発に関する調査研究

後藤 昌人
Masato GOTO

中田 平
Hitoshi NAKATA

Research on Film Education Program Development in University
— The U.S. Film Industry Case Study —

1. はじめに

我々は日々の大学教育の中で、デジタルコンテンツを制作して、それを社会に向けて配信する一連のプロセスが学習できるように教育環境を作り、実践してきた。しかし、時間や予算の都合上なかなか手が出せなかった映画制作への挑戦が、今回の大きな目標である。今まで無かった教育プログラムを作るために、これまで米国（ロサンゼルス）や日本国内の映画スタジオでの調査や関係者へのヒアリングを行ってきた。本稿ではロサンゼルスに加え、ニューヨークでの映画教育の実態を調査し、そこから得られた知見をもとに、現地と連携した日本における映画に関する教育プログラム開発に向けた考察を行うことを目的とする。調査は2012年8月下旬～9月上旬に、ニューヨークに学校の本部がある、New York Film Academy（以下、NYFA）¹での演技指導に関する教育プログラムの調査、ニューヨーク市内の撮影ロケーションの視察および撮影に関する申請について調査を行った。また、ロサンゼルスに関しては、2012年、2013年のいずれも2月下旬～3月上旬に約8日間の現地研修を行った。

2. 映画教育プログラム開発の動機

第一の開発動機として、学生のデジタルコンテンツに対する慣れとコンテンツの使い捨て化の進行が挙げられる。例えばYouTubeを見れば素人からプロまでが作ったハイクオリティなリッチコンテンツが山ほど手に入る。また、インターネットを見れば、FacebookやTwitterのようなSNSや、ブログのようなエンドユーザーが生成する内容が多く、高速回線環境の相乗効果もあり、関連するコンテンツも一昔前とは桁違いな数

¹ New York Film Academy <http://www.nyfa.edu/japanese/>

が電子化されインターネット上にあふれている。つまり、CGM（Consumer Generated Media）と呼ばれるように、消費者がコンテンツを生成する時代になった一方で、多くの学生はコンテンツを日々消費する側の立場にもなっており、「作る」ことの苦労や難しさを簡単にパスして、コンテンツにアクセスできるようにもなっている。そのこと自体は決して悪いことではないが、消費するだけでなく、よりレベルの高いコンテンツを自分の手で一から制作する技術、プロセス、意味や価値も大学教育の中で総合的に身に付けて欲しいとも考える。

第二の動機として、大学教育の方向性が挙げられる。今まで授業やゼミ活動の中で、様々なメディアでコンテンツを作り出してきた中で、映画という分野には時間や金銭面など多くの制約があり、手を出すことができずにいた。しかし、金城学院大学の国際情報学部での海外研修必修化の中で、一つの研修プランとして、ロサンゼルスでの映画制作が現実化してきた今、映画制作への挑戦機会と捉え、コンテンツ制作の幅を広げることへも繋がると考える。

つまり、以上の二点が、今回の映画に関する教育プログラムの開発の主たる動機であり、コンテンツを自分の手でゼロから作り上げるプロセスを身につける題材として映画制作は価値があると考えている。また、学生が集中的に制作に取り組む機会が、より必死になる環境を生み出し、同時に例えばハリウッドという環境から得られる効果も相まって、学生の成長や気づきに繋がればと期待する。

3. NYFAにおける教育プログラムの調査

ニューヨークにあるNYFA本部での調査と、昨年ロサンゼルス校へ実際に学生を引率して研修プログラムを実施したことから分かったNYFAでの教育の特徴について触れておく。

3.1 NYFAの教育特徴

NYFAは、有名な映画「レッド・オクトーバーを追え！」のエグゼクティブ・プロデューサーとして知られるジェリー・シャーロック氏が設立した映画教育を専門とする学校である。ニューヨークを拠点として世界数カ国に分校を構え、年間約4000人の学生が通う。今回我々が訪問したNYFAの本部は、マンハッタンの中南部、14thStのユニオンスクエアの前に立地する。

NYFAでは実践教育に徹しており、環境面でも、例えばニューヨークの街中やハリウッド映画の撮影でも使用するユニバーサルスタジオのセットを学生も使用できることが、何よりも大きなモチベーションを作り出す。座学においても Hands on と呼ばれ

る実地講習形式で、学生に知識や理論を押し付ける教育ではない。映画撮影の基本原則を示した上で、その原則に沿うか沿わないかの判断は撮影者である学生次第だという考えがすべての教員やスタッフに浸透している。映画の最も重要な点はストーリーだとし、学生一人一人の考えやアイデアを尊重することが徹底されている。さらに、「映画撮影の初心者」という扱いではなく、撮影技術や機材の操作スキルについてもレベルの高い内容を教え、撮影環境もプロが制作する映画さながらの環境を準備段階からバックアップしてくれる。学生の要求に対してはスタッフが最善を尽くし、撮影時には的確に指導され、学生が計画したプランに対して妥協をしない撮影を求める。そして何よりも常に映画制作を楽しむという姿勢が教育の随所に出ている点は印象深い。

また、NYFAには世界中から学生が集まってくるため、インターナショナルな環境であることも特徴の一つである。互いに違う言語や文化を背景に持ちながら、英語を中心とした共通言語でコミュニケーションや表現のトレーニングを行うことが出来る。

3.2 教育プログラムの詳細

NYFAニューヨーク校における調査では、Acting と Musical の授業の視察が主な目的であったため、ミュージカルや舞台役者を目指す学生のクラスを集中的に見ることが出来た。多くの講師陣は、現役の役者であったり、ハリウッドで活躍する俳優の演技指導を行っている、まさに実績と質ともに保証されたラインナップである。また、教室やスタジオは、ニューヨーク市内に点在しており（図1）、必要に応じて学生が移動して受講する形式である。一見非効率のようにも見えるが、ニューヨーク自体に数多くのスタジオやレッスン環境があることを考えれば、既存の充実した環境を利用しない手はなく、むしろプロや現役の役者がオーディションやレッスンを行っている環境と同じ場所で学生が学べるのは、おそらく世界中でニューヨークしかない。この点は、講師が授業中に学生に対しての教育の中でも触れていた点でもある。つまり、10分も移動すれば演



図1：ニューヨーク市内に点在する教室とレッスンスタジオ

技に関する世界のトップに触れることが出来るニューヨークで学んでいること自体が、オンリーワンの環境であり、それを日々の学びで活かさないのは愚かであるという考え方である。

まず我々は Meisner（マイズナー）方式で演技指導を行う授業を視察した。はじめに全員共通の台本を頭に入れ、登場人物全員のセリフを覚え、自然に出てくるまで練習を重ねている学生の授業であった。また Improving Presentation（即興発表会）の授業では、その場で出されたお題に対して即興で演技をするもので、海外からの学生でも身につけた語学力のレベルに関わらず全身で表現をするエネルギーには圧倒された。

ところで、Meisner方式というのは Sanford Meisner（サンフォード・マイズナー）が考案した演技術のことで、マイズナーテクニックと言われる演技教育理論として、現在のアメリカでの演技指導に取り入れられているようだ。本稿で演技術について深く掘り下げるつもりはないが、『サンフォード・マイズナー・オン・アクティング』によれば、マイズナーは演技についての理論的な書物は出版していない²。その理由は、同書を読めば明らかのように、理論的な俳優術と言うよりは、俳優個々人のなかから引き出してきた想像上の、あるいは経験上のシチュエーションから導き出された自然な感情を演じる役に投入するという極めて実践的な演技方法であり、理論化することが困難であることは容易に理解できる。1960年代、新劇と言われていた時代の日本の演劇は、もっぱらロシアのスタニスラフスキーが作ったスタニスラフスキー・システムが主流であった。特に、俳優座の千田是也を中心に、俳優術の基本としてこのシステムなしには日本の新劇の誕生はなかっただろう。ロシア、ソ連の公認演劇システムということで左翼思想と浅からぬ縁があるのは当然だが、第二次世界大戦直後のアメリカにも左翼的な思想に共感的な雰囲気があった。レッドパージが吹き荒れた当時、俳優術は、まだスタニスラフスキーの影響が強かった。マイズナーは、もともとはハンガリーからの移民の子であったため、アメリカの多方面での優位の根幹にはこうしたヨーロッパからの移民の勢力があることは明白だろう。こうして、スタニスラフスキー・システムからマイズナーへの移行が進んだものと思われる。今回、こうした俳優術の変遷が確認できたことも大きな収穫の一つであった。

別の日には、複数人の講師が、編集済みのショートフィルムで演技している学生たちの演技と撮影技術について、的確な批評と解説、改善策などを説明し、学生が納得いくまでディスカッションをしていた姿勢にも感心させられた（図2）。最後に視察をした

² 1992年沖縄県知事仲井真弘多の亡妻で翻訳者の仲井真嘉子は、仲井真弘多が沖縄電力の社長になる前、通産省の技官だった頃、ニューヨークに3年間勤務し、同行した嘉子は俳優修行中、いくつかの俳優学校を経過してマイズナーにたどり着き、直接指導を受けたという。

ミュージカルの演技指導の授業では、ブロードウェイの舞台に立った経験を持つような講師陣が学生を圧倒する迫力で生のピアノ演奏をバックに、目に見えない空気感や表現のテクニックを理論的かつ多彩な表現で講師自らがお手本となり、学生に的確にアドバイスをする指導法は参考になる点が多かった。



図2：授業の様子

4. 撮影環境の調査と考察

通常、映画の撮影にはセットを使う場合と、街中や公園などのいわゆる公共スペースや私有地を借りて撮影をする場合がある。ロサンゼルスではユニバーサルスタジオのバックロットを使用しての撮影環境が整えられており、ニューヨークは街全体が撮影場所と言っても過言ではないくらい世界でも有数の映画の撮影地になっている。本章では、教育目的で使用する際の撮影環境や申請などにかかる手続きについてのヒアリングや考察について述べる。

4.1 ニューヨークの撮影申請について

調査から明らかになった点は、街中での撮影に対する制度やマニュアルをはじめとするバックアップ体制が非常に充実している点である。主要な公園や公共施設、道路や建物など、場所に応じた撮影に関する注意事項、手続きの手順、費用や関係者や近隣住民に対する周知方法まで、誰でもオンライン上で確認することが可能である。また、プロから学生までがオンラインで撮影申請することができ（図3）、最短で数日で撮影許可がおりることもあるという。場合によっては、学生の撮影であっても警察が出動し、道の封鎖や交通整理を行うこともあるようだ。

このように撮影関係者は、オンライン上で申請を行うだけで、行政と警察、消防など組織をまたいで撮影のバックアップを受けることができ、そのような体制が映画やコンテンツ産業を活性化させる一役を担っている³。さらに、規模や内容の違いにもよるが、

³ NYCでの撮影申請 http://www.nyc.gov/html/film/permits/shooting_home.shtml

教育目的での学生による撮影が、プロによる撮影申請と同等な扱いで処理される。結果として映画教育の機会均等の一端を行政が担っている点は先進的な例である。



図3：撮影に関する情報や申請のためのサイト

4.2 ユニバーサルスタジオのバックロットの使用について

NYFAロサンゼルス校における最も魅力的な特徴は、間違いなくユニバーサル・スタジオ・ハリウッド（以下USH）のセットを使った撮影環境であろう。USHは1964年に開業した世界でも有数の映画撮影のスタジオであり、テーマパークでもある。我々は今まで二回にわたりNYFAロサンゼルス校で映画撮影研修を実施してきた。その中で関係者にユニバーサルスタジオの利用に関することについてヒアリングをすることができた。

NYFAは授業内での撮影に、バックロットと呼ばれる広大なスタジオの一部のセットを使用する契約をユニバーサルスタジオと交わしており、映画の撮影スケジュールがあいているセットを使用することができる。利用料は、セットごとに決められているようで、高いものは一日の利用料が百万円近くに達する。この価格はユニバーサルの経営方針等に左右され、近年は値上げするセットも多いようである。しかし、学生にとってはこの上ない環境であり、数多くの世界的に有名な映画の撮影に使われてきた場所で、勉強できることは何にも増して高いモチベーションを作り出す。過去二回の研修において実際にバックロットで撮影を行った学生は、一様に口を揃えて二度と経験できない貴

重要な機会と言い、本格的な撮影環境に対する満足度は高かった（図4）。これは日本では実現出来ない、NYFAでの研修ならではの意義と言えるだろう。



図4：ユニバーサルスタジオのバックロットでの撮影風景

5. 経験を通じた学習プログラムについての考察

今回おこなったニューヨークにおける演技の指導方法などの調査や、ロサンゼルスにおける研修現場での指導から、日本の大学で映画制作に関する教育プログラムを開発する上において、いくつかの重要なポイントが明らかになってきた。以下その内容をあげる。

- 映画を撮影する目的や意図の明確化
- 映画の撮影に必要な知識や原則論等の理解
- シナリオを作るために必要な基本構成や脚本作りにおける基礎知識の習得
- カメラの使い方と各機能の意味、撮影テクニックの習得
- 音声の収録方法や、照明の扱い方の習得
- 実践的な演技指導
- 撮影環境のバックアップ
- 編集の基礎知識と編集ソフトの使い方の習得

特にカメラの使い方や撮影の技術的な点については、ロサンゼルスの研修でも行っていた実践型学習である Hands on 形式が有効であることも分かった。

次に、環境面についてであるが、アメリカで映画を撮影するという事実が、満足感を得るための様々な動機付けの基礎になる点である。これは主にアメリカという場所や想像を超える環境が作り出す効果である。特にハリウッドという映画において絶対的なブランドが生み出す効果は、映画撮影がはじめての経験となる学生にとっては計り知れなく、学習におけるやる気や満足感を容易に高めてくれる。

さらにポイントになるのが、学生に与えられた意図的に作られた訳ではない撮影チー

ムという一つのコミュニティの中で、それぞれの意見がチーム内でまとまったり公的に認められたりするプロセスが個人の役割を明確化させ、お互いに高め合いながら実践できる点である。さらに短期間で作品を完成させなければならない現実が、そのプロセスをさらに加速させるものになるだろう。そして、編集を通じて作品が出来上がったときの充実感や満足感が、コンテンツ制作の魅力を再認識し、楽しさの質の強化や固定化につながり、次に何かを学習したい、知識を得たい、技術を習得したいという、「学習」をしたいという意欲や意識が生まれやすくなると考える。

このように経験が生み出す学習の効果は計り知れず、特に成人の能力開発の大部分は経験によって説明することができ、塾達者を育てる上で最も重要な方法は「良質な経験」を積みさせることにあるとされている⁴。特にコンテンツを消費する立場であることが多い学生が、ゼロから制作に取り組む経験としては非常に価値の高いものであると考える。

6. おわりに

本調査から、アメリカにおける映画産業の一端に教育がしっかりと入り込み、現場においては非常に質の高い教育が学生に対して提供されていることが分かった。また、学生の学ぶ環境として、アメリカの映画をはじめとするエンターテインメント産業が生み出す世界トップレベルの環境をフルに生かした体制が教育にしっかりと根付いていることが明らかになった。

日本の学生がアメリカにて学ぶ利点として、これらの環境が作り出す特別な状況は得難いものである。そして、例えばハリウッドで映画を撮影しているという事実が生み出す満足感を背景に、何かを学習するとか知識を得るということよりも、映画を完成させるという「実践」に、結果として「勉強」がついてくる状況が教育プログラムの中にも出来上がると考えられる。このような状況が作り出す実践の重要性とその経験が机上での学習や勉強では得られない効果を生み、結果としてこのような教育環境が、コンテンツの質を引き上げるという意味での影響も大きい。この点においては、ジーン・レイヴらが述べる「状況に埋め込まれた学習」から見たコンテンツ制作については、状況や条件を変化させることで新たな学習効果を見いだすことができるはずである。このように映画に限らず様々なコンテンツの種類と学習環境面での組み合わせによる各ケースにおいても、今後の研究をおこなう余地があると考えている。

⁴ 松尾睦著『経験からの学習 プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版、2006 p5.

[参考文献]

- 「米国における映画制作の実践とその教育について」、CIEC(コンピュータ利用教育協議会) 2012PCカンファレンス論文集、P293-P294、後藤昌人、首藤みなみ、星野明日香、他9名
- サンフォード・マイズナー著 仲井真嘉子訳『サンフォード・マイズナー・オン・アクティングー
ネイバーフッド・プレイハウス演劇学校の1年間』而立書房、1992
- コンスタンチン・スタニスラフスキー著『俳優の仕事』第1部・第2分・第3部、未来書房
2008、2009
- エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マグダーモット、ウィリアム・M・スナイダー
『コミュニティ・オブ・プラクティスーナレッジ社会の新たな知識形態の実践ー』、翔泳社、
2010
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』
産業図書、2011